

道草・明暗について解題

漱石の人生の終盤に書かれた小説「道草」、それに絶筆となった「明暗」である。

「道草」は漱石の人生を色濃く反映し、「明暗」では本格的な近代小説として評価が高い。

「道草」のあらすじはこうである。

遠い所から帰って来た健三は教師として勤めているが、遠い過去から亡霊の如く養父の島田が現れ出てきて金をせびる。

また、その離縁した島田の妻お常も同様に現れてくる。

健三は仕方なく彼等に金を渡す。彼等に裕福であると思われている家計は、実は火の車なのである。

更に、妻御住の実父さえも事業に失敗し没落して無心してくる。

健三は新たに講師のバイトも始め、家計の足しにする。

これらの人物に病弱な姉や小役人をしている兄が加わって話が進んで行く。

無論、金の絡みが問題となっているが、妻である御住との互いに理解できない関係が浮き彫りにされている。

御住はたびたびヒステリーを起こし、健三はたびたび言葉で言い負かす。

ただ、御住は非論理的な反論もするし、そして子を産むなどして強いのである。

本作品の最後の言葉が象徴している。世の中に一遍起こったことは何時までも続く
と主張する健三に対し、御住は、お父様は何も分かっていない、と言って赤ん坊の赤
い頬に幾度か優しく接吻するのである。

「明暗」のあらすじはこうである。

津田は痔の手術をすることになる。

津田は働いているけれども不足分の金を父から貰って生活している。

その金を送られてこずに、金策しなければならない。

実は、津田はお延に好かれて、上司たる吉川夫妻の仲介で結婚している。

ただ、吉川夫妻は、以前に清子と津田とを結婚させようとして失敗している、清子
に逃げられたのである。

妻なるお延は夫に対して絶対的な愛を要求しており、津田との夫婦関係はぎくしゃ
くした心理的な戦いにある。お延は美しくはない、ただ鋭利に知的で情熱的である。

これに対して、津田の妹なるお秀は夫に愛されていれば良いとする相対的な愛しか
ないと確信している。

お秀は子を持たないお延に対して、ほぼ同じ年ながら子を持ち、美しい容姿を乞われて堀と結婚して実地的な考えに基づき暮らしているのである。

津田には、お秀が両親、特に父を巻き込み意地悪をして金を送らせないようにしていると思えない。

そして、お延とお秀はそれぞれ金を都合する。

病院のベッドでの互いの金を差し出して、津田に受け取るように迫る場面は、彼女たちが愛について論争する場面と同様に読み応えがある。

こうした女たちの心理合戦は、それぞれの叔父なる岡本や藤井そして吉川夫人と巻き込み話は進んで行く。

そして遂に、吉川夫人たちはお延に対してある種の罰を与えようとして画策をする。

津田と昔の恋人清子とを会わせることである。退院後の療養と称して清子が湯治して居る温泉に津田を行かせる。

突然の再会に清子は驚くけれども部屋に入れて会ってくれる。

清子は一寸の余裕も与えないお延に比べると寛げる女である。

こうして温泉での津田と清子の行動が始まった途端、本書は絶筆する。

なお、小林という記者になるため朝鮮に行くという、津田を含めた余裕ある上流階級を非難する男の存在が唐辛子のように描かれている。

雑感、、、。

- 1) 「道草」と「明暗」は今までの漱石の小説の系列とは異なっている。
- 2) つまり、小説を作ることによって追及してきた作者漱石の存在論的な問いが、「道草」では自身の生い立ちを多く含めることによって自らの存在を問う自伝ともなっている。
- 3) 「明暗」では各人の相互の心理的な葛藤や論争を通じて幾分重々しい文章ながら、他者なる存在との不理解性や相克などが客観的に丁寧に書かれている本格的な小説である。
- 4) 個人的には少し観念的な「明暗」よりも、「硝子戸の中」のような簡明な短文で書かれている「道草」の方が好きである。
- 5) こうした違いは描く女たちにも表れている。
- 6) 女たちは生き生きとして感情や知力を駆使して迫ってくる。
- 7) 「道草」の御住も「明暗」におけるお延も主人公の男たちに対等に対峙している。

- 8) というより、御住は生活者として子を生み出すことのできる女として頑強に、論争に強い健三を圧倒し上回って生きている。
- 9) お延も理知的な理論家たる津田と対等であるし、在る時には彼を上回っている。
- 10) つまり、主人公なる男たちは結局もはや落伍者でしかない。
- 11) ただ、理論武装して神経過敏になって体裁と名誉のために、女たちと争っているだけである。
- 12) こうした男と女のある種の立場の逆転、存在論的強度の反転は漱石の小説のなかでは初めて描かれていると言っても良い。
- 13) 「虞美人草」の藤尾は西洋かぶれで我が強くとも死なさせられているし、「行人」の直は男を上回っているが、その行動はある種の閾値を超えることはない。
- 14) それまでは女に悩まされながらも男は優位性を保っていたし、神経衰弱に陥っていてもその内面的な葛藤が描かれて男たちは正当化され肯定的に描かれていたのである。
- 15) ただ、「明暗」は本当に本格的な近代小説なのかという疑問がある。
- 16) 解説の桐谷行人は他者との緊張関係を捕らえて本書にドストエフスキーの影

響をあげているが、確かにそう思われることもあるけれど、本書の登場人物も筋書きも重厚であるけれども、どうしても疑問が残る。

17) これはそれまでの作品技法とまるで異なっているために生じている、読み手の不慣れからきているとも思われる。ただ他の日本文学などに比べて心理描写はとても優れている。

18) きっと会話の多さや観念的な色濃さの描写が馴染めず、また小林という唐辛子がもっと悪意に満ちて行動せずに、少し物足りないために生じているのかもしれない。

19) それまでの作品技法を転換させた、まだ試験的な小説であって、漱石はこの「明暗」の後の小説に本格的な心理的表現形式の展開を考えていたのかもしれない。そういう意味で言えば、確かにこの小説は本格的な近代小説の幕開けとも言えるのである。

20) 「明暗」では、津田は優柔不断で自尊心のみが強いけれど、この男を通じて人間そのものの底に根付いている生の意味、自身の存在性と他者性を、客観的に描こうとしていることは確かな事実である。

21) 女たちも生き活きとして心理的にも行動的にも実存性を保って実存している。

22) こうなると、漱石は小説の背後に居て登場人物を操るのではない、もはや登場人物そのものが質量を持ち独立な人間として行動し運動している。

23) もはや、漱石は黒子のようにものの見事に作品の背後に隠れてしまっているこの作品の手法はやはりどう見ても画期的なことである。

24) 初期作品からは考えられない小説技法の変貌である。

25) すると、「明暗」は本格的な近代小説として絶賛すべきなのだろう。

26) でも、まだ完全に納得はしていない。

27) 「明暗」が絶筆なのは惜しいことである。ただ、清子に会ってその結末は相応に暗示されている。

28) 風呂に入りに行く清子を待ち伏せしていたと誤解されて、「ただ貴方はそういう事をなさる方なのよ」（643頁）と断言されている。そうして梯子段の上で清子が蒼くなった事実を問おうとする津田に「何もかももう忘れているんだ、この人は」と言わしめる。

29) 清子の指には結婚を記念するのか、美しい二つの宝石で飾られているのである。

30) でも、なぜ二つの宝石であるのか。「それから」の三千代は昔代助の遣った指

輪をちゃんとしまっている。

31) 指輪でなくて清子の指には宝石が二つもあるのが、この「明暗」の最後を解く鍵になるかもしれない。

32) ただ、本書の結末は清子に会うことで何かを暗示しながらも、清子の態度が曖昧さも匂わせていて結局分からなくさせているのである。

33) 一方、お延は清子との関係を知ってこう述べて予言している。

34) 「何でも可いから、今に見てらっしゃい」「いいえ、生涯のうちで何時か一度じゃないのよ。

35) 近いうちなの。もう少ししたらの何時かの一度なの」「いいえ、貴方のためによ。だから先刻から言っているじゃないの、夫のために出す勇気だって」(518頁)と述べさせている。

36) つまり、本小説の筋を推測すると、お延と清子是对決するのである。

37) いや、お延はお秀や吉川夫人と対決するのである。

38) そうすると、津田はこの対決を導くために清子からは拒絶されなければならない。

39) 敢えて推測するなら、清子は夫に呼び出されて無理に去って行くのであり、

何事も起こりはしない。

40) ただ、帰った途端、津田はお秀や吉川夫人にこの無事件性を非難される。

41) この非難される夫をお延は必死になって守ろうとする。

42) また自らへの非難にも反撃する。

43) ただ、無理がたたって津田の病状は再び悪化する。

44) 彼は危篤状態に陥り、もしくは病状を極度に悪化させて、呼び寄せたお延の耳元に、掠れた声で「おまえを愛している」と告げる。

45) 津田は朦朧とした意識の中で清子の姿を思い浮かべているのである。

46) この愛しているという言葉は嘘であり、本当のことでもある。清子の姿が見えなくなり津田にはお延の声が響いて聞こえてくる。

47) でも、もはや津田にはお延と清子の区別はつかない。

48) お延は津田の手を握りながら大粒の涙を落とす、この涙は敗北ではない勝利の涙である。

49) 津田の死に直面して、もしくはもはや先の見通せない状況において、遂にお延は津田から絶対的な愛を手に入れることができるのである。

50) このお延をお秀や吉川夫人は蔑んで見ている。

51) 津田の真に愛する人を知っているというより、津田の絶望的な状況において、お延に対する優越的な立場はもう微動だに覆りはしないためである。

52) 「道草」と「明暗」を読んでいる最中に、サルトルの「嘔吐」と「出口なし」が浮かんできた。

53) まさしく「道草」に登場する健三に取って、ぷよぷよして寒天のような生まれたての赤ん坊は、マロニエの根を見て実存の醜悪さを見出したロカンタン以上に、存在を物事体と見なしている。

54) そして、妻との尽きることのない諍いは神経を過敏にするばかりの「出口なし」の状態なのである。漱石のこの生き物や他者への感性的な思いは、サルトルより遙か以前に存在の醜悪性を見出している。

55) 意識に取り付いている過敏な意識は常に終わることがなくて、醜悪さを増すばかりである。

56) ただ、そうした意識を持とうとも「道草」に出てくる健三は「行人」の一郎よりも気を使い優しく親切であり暖かい。

57) 「道草」そのものも「門」の最後に述べる宗助の暗い言葉、春になったと喜んでいる御米に「うん、しかし、またじきに冬になるよ」に比べ、明るく澄んでいる。

58) ただ、両作品の主人公とも実存主義で言う「投企」することがない、投企とは無縁である。

59) 「明暗」で津田が清子と会うのは決して未来に向けた投企ではなくて心理的
諍いからの逃避である。

60) ただ、津田のずる賢く優柔不断な性格を清子は見抜いていて、津田を見切っ
て捨てている。

61) 津田は漱石の描く男性主人公と同じく、煮え切らずに神経だけが張り詰めて
いてプライドを持つ男なのである。

62) 現在に寄り添って来る過去、過去の記憶が現在に想起されて現在を成り立た
せせるのは、生けるものの意識の構造とベルグソンは捕えている。

63) ベルグソンが明らかにする「持続」という概念は意識を瞬間として連続する
構造と捕えながら、結局はエラン・ヴィータルとして生命を系譜させ連続させる生の
肯定であり、生の躍動に繋がっている。

64) ところが「道草」や「明暗」の主人公に、過去から出現する人間たちは記憶
の亡霊にも似て、この現在を混沌とさせ生を葛藤へと向かわせている。

65) 葛藤が言い過ぎならば、現在を掻き乱す無秩序なある種の力の過去からの出

現にしか過ぎない邪魔なものであり、生へと肯定されるべき転換点へ決して向かわないものである。

66) 無論それぞれの作品の亡霊には違いがあり、また「明暗」は清子との関係の結末が分からないけれど、清子を介して肯定に向かう可能性は少ない。

67) むしろお延との葛藤における増幅因子である。

68) こう描かなければならないことにこそ漱石の生涯における悲劇がある。

69) ただ、「道草」にて、御住がお父様は何も分かっていないと言って赤ん坊の赤い頬に幾度か接吻する描写は貴重である。

70) 漱石はこの問題の所在をはっきりと認識し、この生の肯定への転換点を、ここからの離脱方法を頭の中では把握していたのである。

71) 即ち、漱石の自らの書く小説が、もはや自らの経験や感情とは離れて葛藤を起こさせるその内容だけの作品を書いていることに注意する必要がある。

72) 「それから」で代助は三千代を捨てたのではなくて、三千代に捨てられたのであると感想に書いていたが、「明暗」では津田が清子に捨てられた筋であって驚いている。

73) この男が女に捨てられる筋は漱石が書かなければならなかった筋であり、捨

てられた理由をどうしても尋ねなければならなかったのである。

74) いわば「明暗」は「それから」の裏返しの作品とみることができる。

75) ただ、小説の枠組みなどを立派にして、本来的な意図を隠している。

76) いわば漱石自身の経験を調べることをせずに、エクリチュールのみで著者のこの意図を解くことができるかどうかの試金石となる作品でもある。

77) 日常は日常であってその背後も日常である。

78) 異界も他界も含んでいない、含んでいたとしてもそれらも日常の内にある。

79) このありきたりの日常を住処にして漱石の描く女たちを切り開く概念は容易ではない。

80) それは子供を産出する、また自らの感情や知に強い女の生への粘着質的な執念と、生を嫌悪して猜疑する男なる主人公たちの諍いの無意味さからくる。

81) でも、諍いは無意味ながら常に意味を持って起こるべく、この生に構造化されている。

82) ただ、これらの女たちばかりではなくて、諍いの平面上を分けすれば多種類の女たちが居る。

83) 女たちの胸の内を切り裂けば露わにされる感情があり、胎内にて捕える感覚

もあり、臓腑の並びの清冽さや流れる血の色の濃度の違いもあるのである。

84) 極端に言えば諍いとは全く無縁に純粹に愛を降り注ぐ「清」なる婆やも居るのである。

85) 文章が少し感情的になり逸れてしまったが言いたいことは、漱石の描く女たちはこの「道草」と「明暗」でも生き生きとしている。

86) ただ、「明暗」では、一般的な女の像から抜け出して、典型的な愛の観念の違いを象徴した活人劇を演じているとも取れるのである。

87) 「虞美人草」の藤尾もそうであった。

88) この観念を象徴した女たちを論じることが難しいことを、書くことの途方もない困難性を言いたかっただけである。

89) でも、本書「明暗」にて迫りくる女たちの言葉にはまさに真実に迫り自らを守ろうとする緊迫感を含んでいる。彼女たちの戦いがとても良くて、読み応えのある作品となっている